

平成21年 4月30日現在

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2005～2008

課題番号：17330134

研究課題名（和文） 社会規範と社会的迷惑行為に関する総合的研究

研究課題名（英文） A STUDY OF SOCIAL NORM and PUBLIC THOUGHTLESS BEHAVIOR

研究代表者

吉田 俊和（YOSHIDA TOSHIKAZU）

名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・教授

研究者番号：70131216

研究成果の概要：研究成果は三つの柱から成っている。第一は、社会的迷惑行為や社会的逸脱行為に関する個人内生起モデルを扱った研究である。第二は、集団内で生起する迷惑行為が集団の組織風土や集団へのアイデンティティによって異なることを、大学の部活動やサークル集団で検討した。第三は、社会的環境（地域の集合的有能感や地域行事への参加など）が子どもの社会化（子どもの向社会的行動や逸脱行動）に及ぼす影響を検討した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,900,000	0	1,900,000
2006年度	1,900,000	0	1,900,000
2007年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008年度	1,800,000	540,000	2,340,000
総計	7,300,000	1,050,000	8,350,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：社会的迷惑行為・社会的逸脱行動・社会的ルールの知識構造・社会的自己制御・組織風土・集団アイデンティティ・集合的有能感・向社会的行動

1. 研究開始当初の背景

(1)1997年から始めた「社会的迷惑行為」の研究テーマは、三つあった。第一は、人々が社会的迷惑行為をどのように認知（構造化）しているのかであった。第二は、人々が感じる社会的迷惑の根拠がどのような理由に基づいて行われるかについてであった。第三は、社会的迷惑行為に対する対処法は、各個人が持っている社会考慮や社会認識とどのように関連するのかであった。

(2)第四のテーマとして、社会的迷惑の発生

を抑制するような教育の可能性について検討を始めたのは、2000年からである。約4年間、附属中学校入学者を対象に学年進行と共に、教育プログラムを開発し、実施した。完成年度の翌年は、教員が自分たちでできるように1年間指導した。

2. 研究の目的

(1)社会的逸脱行動を抑止するための心理教育プログラムを実施し、社会的ルールの知識構造・認知的歪曲・社会的逸脱行為に改善が

みられるかどうかを検証した。

(2) 社会的迷惑行為および逸脱行為といった反社会的行動に及ぼす自己制御の影響過程について、脳科学的基盤が仮定されている気質レベルの自己制御と、成長の過程で獲得された能力レベルの自己制御の2側面に着目し、気質と能力の因果関係を含めた包括的なモデルの検討を行った。

(3) 二者間で成立する衡平性の原理を第三者に拡張し、援助行動の正の連鎖と同様に、迷惑行動の負の連鎖が起きるかを検証した。

(4) 大学生の部活動・サークル集団における迷惑行為の生起および認知に、組織風土と集団アイデンティティが及ぼす影響を検討した。

(5) 信頼感と裏切られ不安が仲間集団排他性と学級享受感を媒介し、いじめ否定仲間規範およびいじめ制止仲間規範に与える影響について検討した。

(6) 地域住民相互の信頼や協力関係に基づく集合的有能感が、向社会的行動を直接促進する直接効果と、地域に対する愛着を介して向社会的行動を促進する間接効果の両方を組み込んだモデルを検討した。

3. 研究の方法

(1) 中学校1年生6学級を対象に、吉田ら(2002;2005)のソーシャルライフ・プログラムとEQUIPプログラムを参考に5セッション実施した。効果の測定は、事前事後の2回、葛藤場面を利用した社会的ルール知識構造、認知的歪曲尺度、社会的逸脱行動尺度を使用した。心理教育プログラムの実施は、授業を利用し月に1回のペースで行った。

(2) 高校生と大学生を対象に、自己制御の気質レベルを測定するために行動抑制システム(BIS)/行動接近システム(BAS)、実行注意制御(EC)、能力レベルは社会的自己制御(SSR)尺度を用いた。

(3) 大学生を対象に2つの仮想場面(傘と報酬の分配)を用い、援助または搾取をされたとき、同様の場面で第三者にどう振る舞うかを質問した。

(4) 国立私立の複数大学で体育会系6団体、文化系7団体に属する1-4年生に質問紙を実施した。内容は、組織風土、集団アイデンティティ、迷惑行為の認知である。

(5) 中学生を対象に質問紙調査が実施された。内容は、いじめに否定的な仲間規範、学級享

受感尺度、信頼感、信頼感・裏切られ不安尺度・仲間集団排他性尺度である。

(6) 7 中学校の生徒を対象に質問紙が実施された。内容は、集合的有能感、地域に対する愛着、向社会的行動、社会的迷惑行為である。

4. 研究成果

(1) 社会的ルールの知識構造における質的な側面であるルール適切性の得点が、特に女子において、事後テストで上昇していた。認知的歪曲の責任の外在化は、男女ともに減少していた。つまり、心理教育プログラムの実施は、社会的情報処理に関する指標を適応的な方向へ変化させる効果を示した。しかし、逸脱行為傾向に対する影響は見られず、遅延効果や発達の影響による解釈が行われた。

(2) SSRの自己主張的側面はBIS/BAS、ECからの直接効果が示されたのに対し、自己抑制的側面はECからの直接効果のみが示された。また、気質レベルよりも能力レベルの自己制御の方が、反社会的行動に強く影響を及ぼすことが示された。さらに、社会的迷惑行為と逸脱行為とでは、気質レベルの自己制御からの直接効果に差異が示され、前者はEC、BASからの直接効果、後者はBIS/BASからの直接効果が示された。能力レベルの自己制御と逸脱行為の関連については、自己抑制と自己主張の交互作用的影響が認められ、自己抑制能力を身につけずに自己主張能力のみを身につけると、他者を配慮せずに自己中心的な行動を行う自己主張能力として歪んだ形で現れるために、逸脱行為に結び付きやすい傾向が示された。

(3) 報酬の分配場面では、過少利得と過大利得の両場面で衡平性の回復が試みられた。ただし、同じ不衡平な状態であっても、被分配後の満足感や公正さ評価は過大利得で高い。傘場面では、第三者から衡平性回復の方法で、搾取を容認する方向へと行動意図を変化させていたことがわかった。

(4) 二段抽出モデルで、集団レベルと個人レベルに分けて組織風土から迷惑行為へのパス図を描いた。集団レベルでは、管理性から集団活動に影響を及ぼすパスと、開放性から集団内の人間関係に影響を及ぼす迷惑行為へのパスが有意であった。個人レベルでは、所属集団の開放性が高いと認知している成員は、2種類の迷惑行為の生起頻度が低いと認知していることがわかった。迷惑度認知に関しては、組織風土と集団アイデンティティの交互作用効果は見られなかった。

(5) 男女別に構造方程式による因果モデルを

検討した。男子は、信頼感と裏切られ不安が学級享受感を介して、いじめ否定仲間規範に影響を及ぼしていた。裏切られ不安は、いじめ制止仲間規範に直接影響を及ぼすだけでなく、仲間集団排他性を介して、間接的にも影響を及ぼしていた。女子の場合は、信頼感→学級享受感→いじめ否定仲間規範と裏切られ不安→仲間集団排他性→いじめ制止仲間規範のルートが分かれていた。学級享受感はいじめ制止仲間規範にも影響を及ぼしていた。仲間集団排他性は、いずれも学校享受感には負の影響を及ぼしていた。

(6)構造方程式による因果モデルを検討した。集合的有能感のうち、社会的凝集性・信頼の因子および共同体環境統制因子は地域に対する愛着を促進し、向社会的行動を生じさせていたが、問題行動統制の因子は、地域に対する愛着をわずかに促進させるが、必ずしも社会的迷惑行為を低減させているという結果は得られなかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 13 件)

1. 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 自己制御が社会的迷惑行為および逸脱行為に及ぼす影響 気質レベルと能力レベルからの検討 実験社会心理学研究, 48, 122-136. (2009). 査読有
2. 中島誠・吉田俊和 第三者を通して行われる衡平性回復行動 報酬分配場面における実験的研究 実験社会心理学研究, 48, 111-121. (2009). 査読有
3. 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 社会的自己制御(Social Self-Regulation)尺度の作成—妥当性の検討および行動抑制/行動接近システム・実行注意制御との関連— パーソナリティ研究, 17, 82-94. (2008). 査読有
4. 中島誠・吉田俊和 日常行動における第三者を介した資源の衡平性回復行動 社会心理学研究, 24, 98-107. (2008). 査読有
5. 大西彩子・吉田俊和 中学校のいじめに否定的な仲間集団の規範について 応用心理学研究, 33, 84-93. (2008). 査読有
6. 原田知佳・吉澤寛之・海上智昭・朴賢晶・中島誠・尾関美喜・吉田俊和 社会的自己制御の形成要因の検討—地域の集合的有能感および暴力事象との接触頻度に着目して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 55, 127-135. (2008). 査読有
7. 尾関美喜・朴賢晶・中島誠・吉澤寛之・原田知佳・吉田俊和 社会環境が子どもの

向社会的行動に及ぼす影響 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 55, 47-55. (2008). 査読有

8. 吉澤寛之・吉田俊和 社会的情報処理の抵抗性を促進する心理教育プログラムの効果 中学生に対する実践研究 犯罪心理学研究, 45, 17-36. (2007). 査読有
9. 尾関美喜・吉田俊和 集団内における迷惑行為の生起及び認知 組織風土・集団アイデンティティによる検討 実験社会心理学研究, 47, 26-38. (2007). 査読有
10. 小池はるか・吉田俊和 共感性と対人的迷惑認知, 迷惑認知の根拠との関連: 行為者との関係性による違いの検討 パーソナリティ研究, 15, 266-275. (2007). 査読有
11. 尾関美喜・吉田俊和 集団での上下関係規範と集団サイズが迷惑の認知に及ぼす影響 応用心理学研究, 31, 1-11. (2005). 査読有
12. 小池はるか・吉田俊和 対人的迷惑行為実行頻度と共感性との関連: 受けてとの関係性についての検討 東海心理学研究, 1, 3-12. (2005). 査読有
13. 出口拓彦・吉田俊和 大学の授業における私語の頻度と規範意識・個人特性との関連: 大学生活への適応という観点からの検討 社会心理学研究, 21, 160-169. (2005). 査読有

[学会発表] (計 36 件)

1. 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 (2008年11月2日). 社会的自己制御と BIS/BAS・Effortful Control が予測する問題行動の差異 日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集, 226-227. (かごしま県民交流センター)
2. 尾関美喜・吉田俊和 (2008年11月2日). 集団内における迷惑行為の影響過程 (1) —情緒的コミットメントに及ぼす影響の検討— 日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集, 334-335. (かごしま県民交流センター)
3. 黒川雅幸・大西彩子・吉田俊和 (2008年10月11日). 内在化された規範がいじめ加害傾向に及ぼす影響 日本教育心理学会第 50 回総会発表論文集, 358. (東京学芸大学)
4. 吉澤寛之・吉田俊和 (2008年10月4日). 仲間集団レベルでの反社会性の共有—社会的情報処理モデルを用いた検討— 犯罪心理学研究, 45(特別号), 2-3. (国立オリンピック記念青少年総合センター)
5. 尾関美喜・吉田俊和 (2008年9月15日). 集団内における迷惑行為への対処行動—組織コミットメントとの関連から— 日本応用心理学会第 75 回大会発表論文集, 72. (横浜国立大学)
6. Harada, C., Yoshizawa, H., & Yosida, T. (July 22nd, 2008). Self-Regulation as a

predictor of delinquent behavior and socially inconsiderate behavior. Poster session presented at 29th International Congress of Psychology, Berlin, Germany.

7. Onishi, A., & Yosida, T. (July 21st, 2008). Peer-group norms regarding abusive behavior: The case of Japanese junior high school students. Poster session presented at 29th International Congress of Psychology, Berlin, Germany.

8. Ozeki, M., & Yosida, T. (July 20th, 2008). The effect of organizational climate and group identity on perception of socially inconsiderate behavior within organizations. Poster session presented at 29th International Congress of Psychology, Berlin, Germany.

9. Yoshizawa, H., Harada, C., & Yosida, T. (July 20th, 2008). Dual intra-process leading antisocial propensity: The prediction power of social information-processing and self-regulation. Poster session presented at 29th International Congress of Psychology, Berlin, Germany.

10. 黒川雅幸・大西彩子・吉田俊和 (2008年6月14日). 仲間集団規範がいじめ加害傾向に及ぼす影響 日本グループ・ダイナミクス学会第55回大会発表論文集, 100-101. (広島大学)

11. Harada, C., Yoshizawa, H., & Yosida, T. (February 9th, 2008). Predictability of delinquent behavior: The role of self-regulation in peer pressure contexts. Poster session presented at the 9th annual meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Albuquerque, New Mexico.

12. 尾関美喜・吉田俊和 (2007年9月23日). 集団アイデンティティが迷惑の認知に及ぼす効果 (2) —集団内の人間関係に影響を及ぼす迷惑行為に着目して— 日本社会心理学会第48回大会発表論文集, 262-263. (早稲田大学)

13. 大西彩子・吉田俊和 (2007年9月22日). いじめに対する仲間規範に関連する要因

の検討 日本社会心理学会第48回大会発表論文集, 486-487. (早稲田大学)

14. 吉澤寛之・海上智昭・原田知佳・朴賢晶・中島誠・尾関美喜・吉田俊和 (2007年9月17日). 社会環境が社会的行動に及ぼす影響 (4) —集合的有能感及び共同体暴力経験が社会的逸脱行為に及ぼす影響— 日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 660. (文教大学)

15. 尾関美喜・朴賢晶・中島誠・吉澤寛之・海上智昭・原田知佳・吉田俊和 (2007年9月17日). 社会環境が社会的行動に及ぼす影響 (8) —中学生による向社会的行動と迷惑行為に着目して— 日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 664. (文教大学)

16. 大西彩子・吉田俊和 (2007年9月15日). いじめに対する学級規範に関連する要因の検討 日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 43. (文教大学)

17. Harada, C., Yoshizawa, H., & Yosida, T. (July 27th, 2007). Structure and construct validity of the social self-regulation. Poster session presented at the seventh biennial conference of Asian Association of Social Psychology, Kota Kinabalu, Malaysia.

18. Ozeki, M., & Yosida, T. (July 27th, 2007). Thoughtless behaviors in groups. Poster session presented at the seventh biennial conference of Asian Association of Social Psychology, Kota Kinabalu, Malaysia.

19. Onishi, A., & Yosida, T. (July 26th, 2007). Intrapersonal processes of abuse of junior high school students. Poster session presented at the seventh biennial conference of Asian Association of Social Psychology, Kota Kinabalu, Malaysia.

20. 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 (2007年6月17日). 自己制御モデルによる反社会的傾向の予測—self-regulationの気質レベルと能力レベルに基づく検討— 日本グループ・ダイナミクス学会第54回大会発表論文集, 100-101. (名古屋大学)

21. 尾関美喜・吉田俊和 (2007年6月17日). 集団アイデンティティが迷惑の認知に及ぼす効果 (1) —集団活動に影響を及ぼす迷惑行為に着目して— 日本グループ・ダイナミクス学会第54回大会発表論文集, 88-89. (名古屋大学)

22. 大西彩子・吉田俊和 (2007年6月17日). 中学生のいじめ加害傾向に影響を与える要因の検討 集団規範の影響に着目して 日本グループ・ダイナミクス学会第54回大会

発表論文集, 80-81. (名古屋大学)

23. 中島 誠・朴 賢晶・尾関美喜・吉澤寛之・海上智昭・原田知佳・吉田俊和 (2007年6月16日). 社会環境が社会的行動に及ぼす影響(2) — 集合的有能感が向社会的行動, 迷惑行為に及ぼす影響 — 日本グループ・ダイナミックス学会第54回大会発表論文集, 168-169. (名古屋大学)

24. 朴賢晶・中島誠・尾関美喜・吉澤寛之・海上智昭・原田知佳・吉田俊和 (2007年6月16日). 社会環境が社会的行動に及ぼす影響(3) — 学校雰囲気と規範意識を媒介変数として — 日本グループ・ダイナミックス学会第54回大会発表論文集, 170-171. (名古屋大学)

25. 吉澤寛之・海上智昭・原田知佳・朴 賢晶・中島 誠・尾関美喜・吉田俊和 (2007年6月16日). 社会環境が社会的行動に及ぼす影響(1) — 集合的有能感及び共同体暴力経験が社会的情報処理に及ぼす影響 — 日本グループ・ダイナミックス学会第54回大会発表論文集, 166-167. (名古屋大学)

26. Yoshizawa, H., & Yosida, T. (January 25th, 2007). Effects of social information-processing on best friendships and group relationships focusing on relational qualities and social networks. Poster session presented at the annual meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Memphis, TN.

27. 尾関美喜・吉田俊和 (2006年9月18日) 組織風土が集団内における迷惑行為の生起頻度に及ぼす影響 日本社会心理学会第47回大会発表論文集, 440-441. (東北大学)

28. 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 (2006年9月18日). Social Self-Regulation 尺度の作成(2) — BIS/BAS・ECとの関連 日本社会心理学会第47回大会発表論文集, 624-625. 東北大学)

29. 吉澤寛之・吉田俊和 (2006年9月17日) 社会的情報処理が友人・仲間集団との関係適応に及ぼす影響 — 関係の構造的側面と質的側面に注目した検討 — 日本社会心理学会第47回大会発表論文集, 22-23. (東北大学)

30. Yoshizawa, H., & Yosida, T. (July 21st, 2006). Effectsof psychoeducational program for facilitating social information-processing in junior high-schoolers. Poster session presented at the 26th International Congress of Applied Psychology, Athens, Greece.

31. Ozeki, M., Yosida, T., & Takai, J. (20th, July, 2006). The affect of organizational

climate on occurrence of sexual and power harassment. Poster session presented at the 26th Applied Psychology, Athens, Greece.

32. 尾関美喜・吉田俊和 (2006年5月28日). 組織風土と集団アイデンティティが迷惑行為の認知に及ぼす影響 日本グループ・ダイナミックス学会第53回大会発表論文集, 126-127. (武蔵野大学)

33. 原田知佳・吉田俊和 (2006年5月27日). 自己制御機能が社会的迷惑行為に及ぼす影響 日本グループ・ダイナミックス学会第53回大会発表論文集, 214-215. (武蔵野大学)

34. Yoshizawa, H., & Yosida, T. (January 27th, 2006). Social information-processing predicts collective delinquent behavior: Interactional model of friend versus peer influence. Poster session presented at the annual meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Palm Springs, CA.

35. 尾関美喜・吉田俊和 (2005年9月25日). 集団の構造的側面が集団内における迷惑行為の生起及び認知に及ぼす影響 日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 680-681. (関西学院大学)

36. 吉澤寛之・吉田俊和 (2005年9月24日). 社会的情報処理モデルによる集団的逸脱行為の予測 — 相互影響過程を中心とした検討 — 日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 32-33. (関西学院大学)

〔図書〕(計 1 件)

吉澤寛之・吉田俊和 (2008年9月) 社会規範と逸脱 『葛藤と紛争の心理学』大淵憲一(編) 北大路書房 P.108-121.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 俊和 (YOSHIDA TOSHIKAZU)
名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・教授
研究者番号: 70131216

(2) 研究分担者

斎藤 和志 (SAITOU KAZUSHI)
愛知淑徳大学コミュニケーション学部・教授
研究者番号: 20211912

高井 次郎 (TAKAI JIRO)
名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・准教授

研究者番号: 00254269

北折 充隆 (KITAORI MITSUTAKA)

金城学院大学人間科学部・准教授
研究者番号：30350961
元吉 忠寛 (MOTOYOSHI TADAHIRO)
名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・

助教
研究者番号：70362217